

## 昔の思い出

杉本 佳巳  
すぎもと よし巳

札幌大学へ入学した秋ごろ、合気道愛好会へ入った。高校では空手をやってきた。直接打撃できない寸止めの日本空手協会である。

空手は直線的動きで間合が近づきすぎると、組み合いもみあいになるが、空手の試合では別けられる。空手とは違う柔術的な動きに興味をもって合気道を始めた。

西岡丘陵のてっぺんに樋口マンションという名の下宿屋があり、もちろん現在生きている人が想像するマンションとは程遠い。なんせ四十年以上前のことだ。よくマンションという名前を探してきた

ものだ。当時は、札幌の中心街でもアパートと言っていた。

ここにぼくの友人たちが住んでいた。ぼくは滝川市の出身なので、帰省して札幌に戻るときの土産として、タレをしみ込ませた松尾ジンギスカンを持っていった（たつぷり五キロ）。そうするとたちまち無くなった。今と違い当時はスーパーなどに松尾の肉は置いてなかった。札幌ではタレに付けて食べるが、松尾の肉は味付で肉の臭みを消してあるのが食べやすかったのか、肉に飢えていたのか、とにかく土産で持参すると肉の奪い合いがおこった。肉を箸で押さえていても、隣からスツと盗まれる。

樋口では、ふるさとが鶴川のI君の部屋（一階二号室）がたまり場で、この人は、まあ常識人でした。群馬県から来たO君はヨガの達人で、せんべい布団と薄着のひとで、ストーブもあったのかどうか記憶にない。向かいの部屋には一期後輩の富山県出身のこれもO君がいたが、この人はきれいな好きで、布団は厚みが二十センチもあり、それが二セットあるので、だれか客人が来ると彼が追い出されることになる。そうすると自然に群馬のO君の部屋に行くが、よく凍死しなかったものだ。一階には名古屋のY君がいるのになぜ彼の部屋に行かないのかと想っていた



ら、一度ほくも招待されたが座る空間が無い。インスタントレーメンがそのままに固まっている。彼は商売人で、オイルショックの時、大学のトイレットペーパーをすべて回収して、押し入れに貯め込み、

下宿のおばさんに売ったという伝説が残っている。二階には東京生まれのM君がいて、この人は天才か奇人か、黒いコートをいつも羽織っていて、ほくが驚いたのは、ポケットから歯ブラシを出した事だ。すごい読書家で、ロシア語もできるときいていた。露西亜語研究会の部長で、した。ほくは経済学部だが、ここには同期の夕張出身のN君がいたが、彼もまた読書家だった。静かな男で、紫煙をくゆらす姿はさまになっていた。別棟にはこれも東京出身のK君がいて、北海道は車がなければダメだと気が付き、ひどいポロ車（コロナ）を持ってきていた。日が暮れると、ほくも大好きな酒ばかり飲んで、いる人だが、朝型で早起きして、水源池散歩のあと本を読んでいるようだった。ほくの記憶では、冬期間だけ母屋に下宿していたロシア語の女の子と、Y君も懐かしい。このY君が札幌大学ロシア語学科

の山田教授になりました。

道内出身の学生は札幌の都会の雰囲気を感じたいのか、市街のアパートなどに住む人が多いのに、内地から来た人は自然を感じたいのだろうか。

合気道の体験ということで、樋口の連中のほか、普段から親しくしている仲間と稽古をした事があった。受身が基本という事で長時間やらせたが、体力消耗させて皆さまには大変申し訳なく思っています。

現在、札幌市内の体育館や大学で、合気道の指導者としてやっているが、受身ばかりせず楽しく稽古ができるよう工夫している。膝の調子も良くないので無理をせずやっている、今日此の頃である。

●編集部から

現在、杉本さんは

札幌合気道会副会長

酪農学園大学合気道部師範です。